

私と女性史研究

秋枝蕭子

昨年六月、父が百歳の天寿を全うして永眠した。父は明治十九年生まれ、しかも九州男子であったが、当時の明治男のみならず、昭和生まれの今日の男子たちに比べても、珍しいくらいに男女平等論者であった。したがって、幼少時から、私は兄や弟と全く同じに扱われ、「女の子」というワクにはめ込まれることなく、自己規制を強いられることなく、また男の子たちに対するのびのびした少女期を過すことが出来たのは幸いだった。

さらに「女もライフ・ワークを持つべきだ」というのが父の方針であった。私自身全く記憶していなかったのだが、後に担任教師から聞かされた次の如きエピソードがある。小学校入学間もない頃、将来何になりたいかとの教師の問いに対し、男の子たちが口々に「総理大臣」「陸軍大将」「運転士」等と遠大な希望を述べたのに対し、女の子たちは異口同音に「お嫁さん」と答えた中で、私一人が「女子大学の先生」と云って、中年の女教師を驚かせたという。その後、私の希望職種はいろいろ変わったが、結果的には、六歳時の予言通り「女子大学の先生」になってしまったのは奇しき因縁とも云えよう。

ところで、私の少青年期は、一歩家を出れば、男女差別が当然

とされた社会であり、法的にも女は「無能力者」の範疇に入れられていた。教育差別、職業差別、政治差別……凡ゆる差別の中の女の状況であった。女たちの状況を変えよう、女性解放乃至女性の地位向上にかかわる仕事をしよう、と、女学生の私が志したのは当然でもあった。その為には、まず英米等の先進諸国に行き、その女性たちの実態調査からはじめようと思ひ、その準備として東京女子大学の英語科に入学したのであるが、戦争の為、卒業時の英米留学の夢は果せず、また家の経済的事情もあって五年間就職した後、当時女子に門戸を開いていた（旧制）東北大学の西洋史料に入学した。英米の女性史を学ぶ為であった。しかし、その事を相談した主任教授は、ニベもなく「女性史などに関心のある者はこの大学にいない、やりたいなら勝手にやり給え」と突き放された。そこで大学図書館に調べに行くと、女性史関係の書は唯一冊もなかった！ 幾度大学を止めようと思ったことか。

辛い間もなく終戦となり、東京にアメリカ文化センターが出来たので、半年ほど日参して、貧るようにアメリカの女性史及び女子教育史の資料を読み、やっと卒論を仕上げた。その後、大学院に進み、女性の社会的地位を示すパロメーターとして女子教育史研究を続け、福岡女子大学に就任してからも、一昨年定年退職するまでの三十余年間、日本及びアメリカの女子教育史の研究を続けて来たのであるが、それは単に懐古的な女性史研究ではなく、女性解放という視点からであり、三ツ児の魂なんとやら……少女期の初心を一貫して持ち続けて来たのである。